

『マイ・フェア・レディ』における「イライザ」とは誰のことだったのか

－ オードリー・ヘップバーンが表象した親密性への欲求 －

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
家族機能・社会臨床クラスター  
平田 麻里子

本稿はオードリー・ヘップバーンという表現者の人生を、文化表象である映画『マイ・フェア・レディ』を媒介させて読み解くものである。その文脈としてエリクソンのライフサイクル論における「親密性」を用いる。

ヘップバーンがヒロイン役として迎えられた映画『マイ・フェア・レディ』（1964）は、彼女が出演を強く希望した作品である。それは作品のプロットである関係性の変化とそれに伴うヒロイン・イライザの内面的変化に共感したからだと考えた。作中でイライザが求め獲得した親密関係をオードリーも自分のパートナーとの関係に求めたのだと考えるのだ。

その「親密さ」がどのようなものであるか確かめるために、まず映画の原作である『ピグマリオン』に流れる親密性の物語を抽出した。そこに特徴的なのは、「主体」を失うことで「主体」を獲得するという逆説的な内面の変化がみられることである。イライザは他者との関係の中で自らの輪郭を見出すようになり排他的な親密関係を必要とした。それは感情や配慮が相互に流れる唯一無二の関係である。

次にヘップバーンの人生物語にもその親密性の物語を見出した。その物語にはいつもパートナーに不満を抱き傷ついている彼女の姿がある。そしてその不満とはイライザが獲得したような親密さが与えられないというものだ。不満を抱きつつも何とかして親密関係のなかで自己の輪郭を見出そうとしていく過程を記述し、それを彼女の親密性の物語とした。